

京都大学	博士（教育学）	氏名	時岡 良太
論文題目	心理臨床における「自分」に関する研究		
（論文内容の要旨） 本研究は、心理臨床における「自分」についての探究を行ったものである。本研究は大きく第1部と第2部に分かれており、第1部（1章～3章）では、「自分」とは何かということについて検討し、第2部（4章、5章）では、現代の「自分」のあり方について、第1部を踏まえて考察している。 1章では、「自我」や「自己」「アイデンティティ」といった、西洋起源の概念と、「自分」との比較検討を行っている。「自分」の根本的な特徴は、西洋の概念で想定されている人間存在のあり方が、その根拠をそれ自身の内部に持つのに対し、「自分」の場合、その存在の根拠は全体的関係性の中にあり、その意味ではそれぞれの「自分」の外部にあるとも言えるということが述べられた。 次に2章では、他者との関係における「自分らしさ」について検討している。その結果、特定の関係性において、その都度現れてくる多面的な「自分らしさ」もあるが、その一方で、西洋の自己観と同様に、自己の内にある「中心」や「本質」のようなものが発揮されていることとしての「自分らしさ」もあり、その2つの「自分らしさ」のあり方が葛藤しながら、それぞれの「自分らしさ」が見出されていくということが示された。 3章では、「自分がない」ということについて検討された。その結果、「自分がない」ということの根本にあるのは、具体的な他者や広い意味での「世界」など、なんらかの対象との関係性における能動性を失っているということだと明らかにされた。 4章では、小説家の平野啓一郎による「分人」という概念を手掛かりとして、現代の「自分」について心理臨床学的考察を行っている。分人というのは、他者との関係においてその都度生じるものであるとされており、その点で、「自分」のありかたと重なっている。平野の作品では、「本当の自分」のような単一の自己像の存在を想定せず、人との関わりごとに生じる「自分」の中の様々な分人ごとに、他者との関係性を見つめていく場面が登場する。これは現代の心理臨床にとっても一定の意義を持つものと考えられる。 5章では、現代の「自分」の一つとして、オンラインゲームやSNSといった、仮想空間における「自分」が取り上げられた。仮想空間では、他者の存在感が希薄であることや、境界の薄さが認められること、生身の身体を持ってないことといった要因のために、そこでの他者との関係性は、現実とは異なるものとなる。そのために、そこに生じてくる「自分」も、現実の「自分」とは別の次元にあるものとして捉えられやすく、その「自分」どうしの葛藤が、現代的な葛藤のあり方なのではないかと考察された。 最後に終章では、本研究全体を踏まえて、心理臨床学的な文脈における「自分」と、現代の「自分」の心理臨床について論じられている。そこでは、「自分」とは他者とのその都度の関わりにおいて成立するような、多面的で中心がないという特徴を持つ一方で、西洋近代的な中心をもつ「自分」のあり方もあり、それらはどちらか一方が正しいということではなく、両者が葛藤していく動き自体が「自分」を生み出していくのではないかと考察された。今後は、ここで得られた知見について、臨床実践の中でさらに検討を深めていく必要があることも、課題として示された。			

(論文審査の結果の要旨)

本研究は、心理臨床における「自分」についての探究を行おうとしたものである。本研究は大きく第1部と第2部に分かれており、第1部(1章～3章)では、「自分」とは何かということについて検討し、続く第2部(4章、5章)では、現代の「自分」のあり方について、第1部を踏まえて考察している。

「自分」ということばは日常的にも使用される用語であるが、これは心理学において非常に重要な概念であり、特に、心理臨床の領域においては、しばしば中心的な話題として挙げられるものでもある。

本研究は、まず、こうした「日常」のことばでありながら、心理学(臨床心理学)の領域において重要な位置を占める「自分」という概念を丹念に探究したことに意義があると考えられる。

来談者は、心理学の知識をもって語るわけではなく、ごく日常のことばを用いてみずからのこころの有様を語る。たとえば、「自分らしい」や「自分がない」といった、普段よく使用される言語を用いるわけであるが、そのことばがはたして臨床心理学的にはどのような意味をもつのか、ということは、これまで十分にアプローチされてこなかった。本研究は、そうした、「日常性」と「専門性」を繋ぐという意味で、意義ある研究と認められる。

まず、第1章では、「自我」や「自己」「アイデンティティ」といった、西洋起源の概念と、「自分」との比較検討を行っている。そこでは、「自分」という概念が、その存在の根拠を全体的関係性の中にもち、その意味では、成立根拠が「自分」の外部にあるとも言えるということが明らかにされた。同じ「自分」を示す言葉でも、西洋的な起源をもつものと日本のそれとは本質的な違いがあり、その点をまず押さえておくことは重要である。

次に2章では、他者との関係における「自分らしさ」について理論的な検討に加え、この言葉による連想をもとにした調査をおこなっている。その結果、その都度現れてくる多面的な「自分らしさ」もあるが、その一方で、西洋の自己観と同様に、自己の内にある「中心」や「本質」のようなものが発揮されている「自分らしさ」もあることが見いだされ、その2つの「自分らしさ」が葛藤しながら、「自分らしさ」が見出されていくということが示された。

3章では、「自分がない」ということについて実証的に検討しており、「自分がない」ということの根本にあるのは、なんらかの対象との関係性における能動性を失っているということであるということが見いだされている。

このように、第1部においては、「自分」という広い概念に対して、丁寧に「スケッチ」をおこなっていること、そして、ともすれば迷路に入り込みがちな概念に対して、わかりやすくそれを呈示したことは、評価に値すると考えられる。

続いて第2部においては、まず第4章で小説家の平野啓一郎による「分人」という概念を手掛かりとして、現代の「自分」についての心理臨床学的考察を行っている。分人というのは、他者との関係においてその都度生じるものとされており、平野の作品では、人との関わりごとに生じる「自分」の中の様々な分人ごとに、他者との関係性を見つめていく場面が登場する。こうした「自分」への視点は、現代の心理臨床にとっても意義を持つものと考えられる。

さらに第5章では、現代の「自分」の一つとして、オンラインゲームやSNSといった、仮想空間における「自分」を取り上げている、現代社会における「自分」の意味に関する精緻で挑戦的な考察をおこなっている。このように「自分」をめぐる探究は、「自分」をとりまく環境や時代と不可分だと考えられ、それを取り上げているところ

にも意義があると思われる。

一方で、本研究における探究が、まとまってはいるものの深みやダイナミックさに欠けること、心理臨床の実践に根ざした考察が不十分であることなどの指摘もなされた。しかし、これらの指摘は本論文の今後の可能性への課題と期待であって、本論文の価値をいささかも損なうものではない。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成 29 年 5 月 31 日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第 14 条第 2 項に該当するものと判断し、公表に際しては、（期間未定）当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： _____ 年 _____ 月 _____ 日以降